

# 実存響応の達成

## The Achievement of Existential “Echo-respondence”

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際武道大学  
International Budo University



先駆的二人称, 存在の三位一体, 球面モデル, 実存達成

anticipatory second person, the trinity of being, sphere model, existential achievement

### ABSTRACT

人間存在の目的は実存響応を達成することである。実存響応とは、人間同士がまた人間と神が愛の二人称となって、響き合い応え合うことである。しかし、人間の罪のゆえに実存響応の達成は困難である。しかし、イエスが十字架によって先駆的二人称を一番目に確立したことにより、後に続くものも先駆的二人称を確立することが可能になり、実存響応への道が開けた。二人称の関係は、一人称と三人称を生成し、神的な存在も人間的な存在も、存在は人称的な三位一体の構造を持つ。この三位一体を球面モデルで表象できる。二人称-二人称関係の実存達成は、一人称-三人称の対象化空間を生成することから見ても、無人称-無人称関係の実存達成よりも高い水準を持つ。

The purpose of the human being is to establish existential “echo-respondence”. “Echo-respondence” refers to the echoing and responding that occurs between two human beings and between the human being and God that are all second persons of love. However, it is not easy to establish “echo-respondence”, because of human sin. Nevertheless, on the basis of the fact that Jesus established the anticipatory second person for the first time in history on the Cross, it became possible for his followers to establish the anticipatory second person and that opened the path to the “echo-respondence”. The relationship of second persons generates the first and third persons, and the being, whether divine or human, possesses the grammatical personal trinity of being. This trinity can be represented by means of the sphere model. Viewed from the fact that it generates the objectification space between the first and third persons, the existential achievement of the second person-second person relationship may be considered to possess a higher level spirituality than the achievement of the impersonal-impersonal relationship.

人間存在の目的は実存響応を達成することである。実存響応とは、向かい合う人間存在がお互いにとって愛の二人称（すなわち、先駆的二人称<sup>1)</sup>）となって、お互いを受け入れ合うことである（「正しい人は互いに受け入れる」箴言14：9）。受け入れ合うとは、響き合い応え合うことである。また、人間同士だけでなく、神と人間が向き合っ、お互いに愛の二人称となって響き合い、応え合うことである。

しかし、実存響応を達成することは容易ではない。人間は実存響応を達成できずに、社会には不協和音が鳴り響いている。クラシック音楽の現代的展開が、不協和音に満ちていることが、実存響応の破綻を象徴している。現代絵画にも、実存響応の破綻を反映したものが多い。

芸術が実存響応の破綻を描写するのは、芸術家が実存響応を求めているからである。しかし、実存響応への道のりがあまりに険しく、われわれがやっと辿り着いた荒野はあまりに不毛だから、芸術家は嘆きによって自己の魂の清純さを表現するしか道がない。

どうしてそうってしまったのか。なぜ、人間は愛し合えないのか。なぜ、傷つけ合うことしかできないのか。

人間が端的に一人称であれば、人間同士は一人称と一人称の、エゴとエゴのぶつかり合いになり、そこに実存競合が発生する。人間の人称的な定義が単純な一人称であるとすれば、そこに救いはない。現代人が一人称を確立しようともがくことが、一人称の首を絞めることになる。一人称が一人称を確立することはできない。結果として、現代人は救済を求めている。しかし、現代では、なんとかして自己の救済を求めることすらエゴイズムになってしまいかねない。なぜなら、自己が救済されてから、おもむろに他者救済に向かおうとするのでは、他者の救済に間に合わないからだ。

そのような緊急の場合にはどうすればよいのか。そのような時は、自分の救済を後回しにして、他者を救済するしかない。実際イエスはそのように生きたのだ。だから、十字架上のイエスも罵倒されている。「十字架から降りて自分を救ってみ

ろ」（マルコ15：30）「他人は救ったのに、自分は救えない」（マルコ15：31）イエスの実存は、他者救済を自己救済に優先させる実存であった。

しかしそれでは、われわれもイエスのように他者救済を自己救済に優先できる能力を持っているであろうか。持っているとは言い難い。というのも、人間は、そこからエネルギーを汲み取ってくる精神的資源というものを豊かに持たなければ、対人関係で豊かに応答することはできないのだ。だから、われわれは他者を愛し救済するためにも、われわれ自身の精神的資源、すなわちわれわれの実存を支え、われわれに生きる力を与える基盤というものを持たなくてはならないといえる。だとすれば、そこに自己救済優先の動機づけの正当化をみることもできるのではないだろうか。つまり、自己救済が実現していない人には、他者救済の活動を行う力さえないということもまた、言えるのではないだろうか。

あるいは、自己救済と他者救済のどちらを優先させるかなど考えずに、みんなが同時並行的に神と関わり、同時並行的に自己救済を実現すればよいという考え方もあろう。もしそうだとすれば、それは、人間同士の実存響応に問題があっても、取りあえずそれは考えなくてよいから、まずそれぞれが、神との実存響応を達成すればよい、ということになるのではないだろうか。それは、神との実存響応を達成して行けば、おのずと人間同士の実存響応は達成できると楽天的に考えることになるだろう。

しかし、そのように楽天的に考える人は、一体地獄のような荒れ地に立って、そこから歩み始めたことが本当にあるのであろうか。

虚無に満ちた世界、生きる意味を失った人々がうごめく世界。そのような荒れ地に立つ人は悠長なことは言わない。いまここで、「わたし」も隣人も死の世界に生きているのである。問題は緊急性があるのである。

人間は究極的な超越者に会うことより、いまここで隣人を求めているのである。しかし、だれが彼の隣人になれるのか、と再び疑問がよぎる。よきサマリア人になれる人はすでに超越者と交



わった人ではないのか。すでに自己が救済されている人が、はじめて他者のためのよきサマリア人になれるのではないのか。そのような疑問が再び生じる。

こうしてわれわれは、現実には、繰り返し自己救済と他者救済のジレンマに立つ。しかし、その問題をゆっくり考えている時間はない。この瞬間も、「わたし」も「あなた」も「かれ」も落ちて行くのである。

そうすると、万事うまく行く解決方法などないことになる。今、どうするか、とすれば、「わたし」は自己もまだ救済されていないのに、ともかく隣にいる人をなんとか救済すべくもがくしかないのである。

しかし、「わたし」はまだ救済されていないから、「わたし」には「わたし」の罪もあれば欲望もある。他者を救済しようとしても、「わたし」は果てしなく自己の内部から頽れて行く。それでも「わたし」は諦めず、何度も立ち上がる。何度も頽れ、何度も立ち上がる。しかし、立ち上がった後も、今度は他者が他者の罪と欲望で「わたし」に襲いかかり、「わたし」を無限に苦しめる。他者を救済しようとしているのに、その他者から激しい攻撃を受ける。前にも後ろにも、内にも外にも罪と欲望がうごめき、まったく救済の見込みはない。それでも、「わたし」はまた他者救済へと立ち上がる。

そういった救いのほとんど見えない苦闘の中で、「わたし」が一步踏み出す度に、「わたし」と他者の間に決して消え去ることのない、歴史性が刻まれて行く。そこに歴史の一回性が刻まれて行く。それが現実の歩みなのだ。

そして、一步一步われわれは、牛歩のごとく救済にそして神に近づく。それは、旧約聖書の描く苦難の歴史と自己の人生の歴史が照応してくるかのような日々となる。

そのようにして生きる以外に実存響応に至る道はない。そのようにして実存響応に到達するのを、実存達成という。実存達成は歴史性なのである。個人史の中で、実存達成をなし遂げていない人が真理を概念的に開陳してもほとんど意味がな

い。個人史の中で、実存達成を成し遂げているなら、その人はすでに存在が真理だから、それを大声で語る必要もない。

しかし、実存達成は人間の努力によってのみなされるのではない。人間がどんなに努力しても、その努力は自己の罪と他者の罪によって、繰り返し徒労のように虚しいものとなっていく試煉をくぐり抜ける。重要なことは、もしその試煉をくぐり抜ける支えがなければ、われわれの実存達成は不可能となることだ。

実存響応を人称理論の観点から見ると、それは二人称と二人称の向かい合いと言える。この場合、二人称は先駆的二人称である。先駆的二人称とは「こちら側」から見た「向こう側」の二人称ではなく、「こちら側」が「向こう側」の呼びかけを予期して、先駆的に二人称のペルソナをつけることである。わかりやすい言葉で言えば、「こちら側」が相手を受け入れる態度をみずから進んで取るということである。お互いがそのような先駆的二人称になれば、お互いは響き合い、応え合うことができる。

しかし、われわれは純粋な二人称-二人称関係に入ることはできない。なぜなら、われわれはだれも純粋な先駆的二人称にはなれないからである。

われわれが純粋な先駆的二人称になれない理由は二つある。一つは「こちら側」の罪であり、もう一つは「向こう側」の罪である。「こちら側」が先駆的二人称になろうと努力しても、絶えず「こちら側」の内部から欲望の一人称が首をもたげ、先駆的二人称を不純なものへとおとしめてしまう。また、「こちら側」がかるうじて先駆的二人称を維持できたとしても、今度は「向こう側」が「こちら側」を受け入れる先駆的二人称を維持できないために、結局実存響応は達成できず、関係は失敗する。

先駆的二人称は愛の人称だが、所詮人間は愛を維持できないから、二人称-二人称関係は失敗するのである。

それでは、二人称-二人称関係が成功し、実存達成が可能になるにはどうすればよいのであ

うか。そのためには、まず、誰か一人が完全なる先駆的二人称を達成するしかないのである。

誰かが完全な先駆的二人称を達成すると、どうなるのか。そうすると、二番目の人は、その一番目の人と向き合えばよいのである。二番目の人は、すでに一番目の人が先駆的二人称を達成しているから、自分の努力は「向こう側」に十分に受け入れられている。その「向こう側」の愛により、「こちら側」の罪も赦されて「こちら側」は罪から自由な決断ができるようになる。そして、「こちら側」の実存達成はもはや決して裏切られることがない。

まず始めに、先駆的二人称を決定的に確立する人が、すべての他の人たちの実存達成のための「隅の親石」となるのである。おそらくイエスの十字架が救済となるのは、イエスが十字架に於いて先駆的二人称を第一番目の人として決定的に確立したからであろう。

イエスが先駆的二人称を完全に達成したことによって、イエスの周囲につきつぎと先駆的二人称を確立する人々が出現した。その二人称関係の実存達成の歴史の中の一齣をわれわれはわれわれの人生で生きているのである。

先駆的二人称がお互いの中で確立されると、「こちら側」も「向こう側」も存在の表の「面」は愛の二人称に固定される。すると、お互いに相手の二人称に許されて、相手の二人称の愛を受け止める座としての一人称が奥深く手前に「点」として生成する。その一人称の視「点」から表の視「面」の裏面を見ると、裏面は三人称の身体である。

このように愛の二人称-二人称関係にあるお互いは、それぞれが一人の内部に一人称、二人称、三人称を同時に持つ、人称の三一構造を持っている。

この三一構造をモデル化すると、球面モデルがよいように思える。球面というのは、ボールのような球面であり、中は中空になっている。そして、球面は外側が二人称、内側から見た裏面が三人称、球の中心の位置に一人称の視「点」がある。表面の二人称は他者に対する愛の人称である。このお互いの愛の二人称が相手の二人称の奥に、対象化空間を生成するのだといえよう。対象化空間の中

で自己の一人称と三人称の乖離した対象化構造が出現するのだ。

一人の人に同時に三つの人称が成立するということは、そもそも人間存在が三一性を持っていることを意味している。

しかし、このことはそもそも存在というものが三一性を持っていることの反映ではないだろうか。なぜなら、「存在」である神は三一性を持っているからである。

すると、神の三位一体も人称の三一性で捉えることが出来るのであろうか。今、仮に、父なる神を一人称と考えてみよう。すると、子なる神は客観的に三人称的に世界に肉体を持って現れたという意味で、三人称の神と言えるかもしれない。すると、聖霊は純粋な二人称の神となろう。三位一体をペルソナの観点で捉えることは、ペルソナを人称の概念で把握すると、人称の三一性となるのである<sup>2</sup>。

すると、人間存在に於ける人称の三一性は、神に於ける人称の三位一体の反映ということにもなる。

ただ、イエス・キリストの場合、彼が先駆的二人称を完成させたことや、彼が人間として、人間の人称的三一性を持つと考えると、イエスは神の三位一体の中では三人称の役割を持ちながら、入れ子構造のように、自分自身は人間として、一人称も二人称も三人称も持っていることになる。

「存在」の構造は、おそらく人称的三一性なのである。そして、この三一性は愛し合う二つ以上の「存在」において成立している三一性で、一つの「存在」が一つのみで安定的に存在するのではないのである。存在の人称的三一性は、複数の存在がお互いに愛し合い、支え合い、実存響応の関係に入ることによって安定するのである。

実存響応の関係を二人称と二人称の響応と見た場合、そこには非対象化空間が成立している。しかし、その二人称-二人称の非対象化空間が、お互いの二人称の向こう側に、一人称-三人称の対象化空間を生成する。つまり、非対象化空間が対象化空間を産み出すのである。一人称-三人称の対象化空間は、二人称-二人称の非対象化空間に



よって、実在性を保証されているのである。

言い換えるなら、愛の二人称関係が、一人称-三人称の対象化関係を生成し、支えているのだ、といえよう。

ところで、理論的には、実存響応には無人称-無人称の響応関係もありうる。非対象化空間には、二人称-二人称の愛の関係の他に、無人称-無人称の照応する空間もありうる。しかし、無人称-無人称関係は愛の関係というよりは、より感情の高まりの少ない、沈静化した関係ではないだろうか。また、無人称-無人称関係は、一人称-三人称の対象化空間を十全には生成できない。無人称の関係は、関係性の積極性が希薄なのである。言い換えるなら、無人称関係を基盤にした場合、対象化空間は盤石な基礎を確保することができない。だから、二人称の代わりに無人称を取り入れた、無人称-一人称-三人称の三一構造は充分発達しないのである。

しかし、その一方で、無人称と二人称の親近性というものもあることはある。無人称と二人称は近い人称でもある。

一人称-三人称の対象化空間に縛り付けられた現代人は、それから逃れようともがき、非対象化空間を目指す。その際、無人称-無人称の実存照応を達成できれば、それはそれですばらしい実存達成だとも言える。しかし、すでに述べたように、無人称の実存達成は、そこから一人称-三人称の対象化空間へ戻ってくるのが難しい。人称の三一性が無人称関係からは成立しにくく、一人称-三人称の関係の確実性が脆弱になる。

しかし、二人称-二人称関係での実存響応の達成は、そこからして、十全なる人称の三一性を産み出す。したがって、わたしには、二人称-二人称関係のほうが無人称-無人称関係よりも優れているように思われる。

ただ、二人称-二人称関係の生成が、あまりに厳しい茨の道であることを考慮すると、むやみに二人称関係を推奨することもできない。純粋な二人称-二人称の実存響応を目指すあまり、その厳しさに落胆して絶望の病に陥るよりは、無人称-無人称関係をひとまず目指すことは、間違いで

はないように思われる。

おそらく、歴史的に見ても、純粋な二人称-二人称の実存響応が社会的に成立したことは稀であったのではないかとと思われる。ただ、それが成立した場合にのみ、力強い一人称-三人称関係が健康な形で発生したのではないかと、と思われる。そこまで発達しなかった社会では、無人称-無人称の実存照応を目指したものと思われる。そういった所に、文明のメルクマールがあったのではないだろうか。

いずれにしても、二人称の実存響応の達成というものは、驚くべきものである。そういった観点から見た場合、聖書の持つ実存達成の水準はあまりにも高いというべきであろう。愛の二人称関係の達成と言う驚くべき意味生成の現場に立ち会うこと以外に、われわれの目標はないのである。

## 参考文献

- 上田閑照・八木誠一 (2010). 対談評釈 イエスの言葉 / 禅の言葉 岩波書店.  
川津茂生 (2007). 先駆的二人称から見た存在 教育研究, 49, 21-29.  
川津茂生 (2008). 人称的構造の素描 教育研究, 50, 21-28.  
川津茂生 (2009). 一般人称理論へ向けて 教育研究, 51, 1-9.  
川津茂生 (2010). 和解の人称 教育研究, 52, 29-36.

## 注

- 1 「先駆的二人称」は、川津 (2007, 2008, 2009, 2010) が愛の定義として発表し、展開している概念である。
- 2 八木 (上田・八木, 2010, p.127) は、三位一体の「位」を「ペルソナ」と訳すと、なにかしら人格主義的な形ができあがって、三位一体が分らなくなる、と語っているが、わたしは、人称理論的な観点から、神でも人間でも、存在は人称 (person) の三一性 (trinity) を持っていると考えることが正しいのではないかと考えている。Personの根底にimpersonalがあるのか、impersonalの根底にpersonがあるのかは、根本的な問題だが、わたしは、personが根底だと考える。おそらく、西田哲学の場所の論理を乗り越えるものは、personのtrinityを人称理論的に捉えて、beingというもののtrinityを考えて行く方向性の中にあるものと思える。ということは、無人称の場所を支えているものは、二人称の人格だということである。世界は、根本的に人称的、人格的なのである。